

## 書評

Johannes Rütsche, *Das Leben aus der Schrift verstehen* – Wilhelm Diltheys Hermeneutik  
(『書かれたものからの生の理解—ヴィルヘルム・ディルタイの解釈学』)

瀬戸口 昌也

本書は、ディルタイ (Wilhelm Dilthey, 1833-1911) の解釈学についての最新の研究書である。著者のヨハネス・リュッチェは1944年スイスのベルンで生まれ、ベルギーのLeuven大学で哲学の学士号を得た後、スイスのザンクトガレン大学で助手を勤め、さらに哲学と神学の研究に従事しながら、1998年Leuven大学で哲学博士の学位を得た。本書はその際の学位論文である。

著者がこの研究で意図していることは、「これまでほとんど体系的な観点からは研究されてこなかったディルタイの解釈学の理論を、ディルタイの思考全体の連関から明るみに出すこと」(S.5)である。著者はそのために、ディルタイの初期から晩年にかけての著作をくまなく考察の対象としているが、中でもディルタイ初期の1859年に書かれたシュライエルマッハーの解釈学についての懸賞論文(『古いプロテスタント解釈学との対決におけるシュライエルマッハーの解釈学の体系』、ディルタイ全集XIV巻所収)と、後期の1900年に書かれた有名な論文『解釈学の成立』(ディルタイ全集V巻所収)の二つの論文を、ディルタイ解釈学の最重要文献として位置づけている。そしてこれらを中核として、ディルタイ自身の解釈学の発展を、3つの主要概念—「生 (Leben)」、「解釈 (Auslegung) ないし理解 (Verstehen)」、「書かれたもの (Schrift)」—に着目して体系的に描き出そうと試みている。したがって本書は、デ

ィルタイの解釈学についての本格的かつ緻密な歴史的=体系的研究であると言えるだろう。

ディルタイの解釈学が、現代の哲学や精神諸科学に多大な影響を与えていることは周知の事実であるが、しかしこれらの領域においてディルタイが引き合いに出される場合、たいていは彼の後期の解釈学の構想、とりわけ先の論文『解釈学の成立』や、また『精神科学における歴史的世界の構成』(1910年)が参照されることが一般的である。このことはディルタイの解釈学の構想が、とりわけ後期に顕著になっていることに基づいている。しかしディルタイ自身が早くから解釈学の重要性に気づいていたことは、彼の初期のシュライエルマッハー研究からも明らかであり、ディルタイの解釈学を論じるのに、後期の著作のみでなく、彼の初期及び中期の著作に注目し、彼の著作や思考の発展全体からその本質を探り出すことは、ディルタイ研究者だけでなく、哲学や精神諸科学において解釈学に関心を寄せる研究者にとっては、必要不可欠な作業であると言えよう。その意味で本研究は、ディルタイ研究ばかりでなく、現代の解釈学研究においても重要な位置にあると言える。

本書の構成は、全体で大きく3部から成っている。第1部では、ディルタイが「解釈学」という概念をどのように理解していたかが、彼の著作全体の連関から示される。著者によれば、ディルタイの解釈学は「書かれたものとして固

定された生の表出の解釈のための科学 (Wissenschaft) 及び技術論 (Kunstlehre) (S.55) とされる。第2部ではこのような観点から、ディルタイの解釈学が「解釈の技術論」と「解釈の科学」という二つの側面から考察される。この考察でディルタイの解釈学が、シュライエルマッハーの聖書解釈学を批判的に継承していることが明らかにされる。第3部では、ディルタイの解釈学と彼の「生の哲学」との関係が考察されている。ここではディルタイの「生」概念の考察に始まり、生の哲学における「現実 (Wirklichkeit)」と「書かれたもの」との関係に進み、ディルタイの哲学と解釈学の限界と現代的意義を示して考察を終えている。これら3つの構成全体を通して、ディルタイの解釈学は、シュライエルマッハーの解釈学の影響の下に、解釈の技術論から解釈の科学へと展開し、彼の生の哲学へと関連していくことが明らかにされている。

著者の考察は詳細を究めており、ディルタイの解釈学についての初期から晩年に至るまでの文献に即しているだけに、確かな説得力を持っている。この研究が現在のディルタイ研究に対して持っている意義は、以下のような点であると思われる。

第1にディルタイの解釈学の展開を、「書かれたものの解釈の技術」という観点で、ディルタイ初期から明らかにした点である。ディルタイの解釈学の展開については、従来ディルタイ後期を境にして、「心理学から解釈学への移行」という観点（いわゆる「解釈学的転回」）で語られることが一般的であった。著者はこのような見解に対して、ディルタイの解釈学への関心は、その初期からディルタイ晩年に至るまで一貫していると主張している。著者の主張が正しければ、ディルタイの心理学も解釈学を基底に

して展開されていることになる。このような見解は、ディルタイの哲学や精神諸科学の基礎づけの学をめぐる議論—心理学か解釈学か—に、新たな論点を提出することになるだろう。

第2にディルタイの解釈学が、「解釈の技術論」から「解釈の科学」へと展開していく過程で生じる問題を指摘している点である。この展開の過程は、ディルタイにとって、解釈の対象が書かれたものから歴史的世界全体へと拡大していくことを意味している。ところで、歴史的世界の解釈のためには、人間の生活経験を言語によって「文字化 (Verschriftlichung)」する必要はあるが、著者はこの生活経験の文字化について、ディルタイに矛盾した二つの見方があることを指摘している。ひとつは人間の生活経験が、言語によって完全に客観的現実性を持って表現されるという見方である。ディルタイはこのような見解の下に、その初期から解釈学の歴史を研究し、その科学的性格を追求してきたと言える。しかしその一方で、ディルタイは生活経験の言語化は、人間の生を言語（概念）によって固定化するものであり、それによって人間の内的な生活経験の豊かな意味は覆い隠されてしまうのではないかという見方もしている。ディルタイはこのような見解の下に、客観化され、個別化された人間の精神的産物を、生き生きとしたもとの生の流れ全体へと戻してやる解釈学の必要性を説くのである。ディルタイの言う「生を生それ自体から理解する」生の哲学は、まさにこのことを意図している。

ディルタイの解釈学に見られるこのような矛盾した見解は、ディルタイ後期の解釈学（歴史的世界を解釈する科学）にのみ注目する場合、問題化することはなかった。ディルタイの解釈学を、初期の「書かれたものの解釈の技術論」という観点から検証してきた著者の考察によつ

て、初めて問題化されたと言える。つまり、デ  
イルタイの解釈学が技術論から科学へと発展し  
ていく過程には、いわばある溝が存在している  
のであり、この溝はデイルタイ自身によって埋  
められることなく、現代の解釈学研究が抱えて  
いる本質的な問題となって残されているのであ  
る。それは人間の生活経験の表現と理解に、言  
語はどのように関与するのかという問題であ  
る。デイルタイ自身によって解決されることの  
なかったこの問題に、先鞭をつけたのがデイル  
タイの直弟子であるゲオルグ・ミッシュであ  
り、またハンス・リップスやヨーゼフ・ケーニ  
ツヒらであった。彼らはそれぞれの立場から生  
と言語（概念）との関係を考察し、「解釈学的  
論理学」と呼ばれる生の哲学の立場に立った論  
理学を展開しようと試みたのである。この解釈  
学的論理学こそ、技術論としての解釈学と科学  
としての解釈学との溝を埋める可能性を持った  
研究であり、また生の哲学を解釈学的・論理学  
的に基礎づける可能性を持った研究であったと  
言える。しかしこの運動は、第2次世界大戦に  
よって中断されて以来、活発な展開を遂げるこ  
となく現在に至っている。

著者の研究が現代のデイルタイ研究に対して  
持つ第3の意義として、デイルタイの解釈学と、  
彼の哲学上の業績（心理学、認識論、論理学、  
歴史的理性批判、世界観学など）との関係につ  
いて、両者の区別の必要性を強調している点が  
挙げられる。著者のこの見解は、今後のデイル  
タイの解釈学研究の方向性を次のように定める  
ように思われる。すなわち、デイルタイの解釈  
学研究は、彼の個々の哲学的研究と同時に発展  
していったのであり、両者の発展の中で、やが  
て彼の生の哲学全体の体系的基礎づけが意図さ  
れていたということである。このデイルタイに  
よる哲学体系の基礎づけの試みは、特に後期の

著作『哲学の本質』（1907年）において見るこ  
とができるが、しかしそこで哲学と解釈学との  
関係は、決して明確には述べられていない。も  
し、解釈学を哲学の一領域としてではなく、ボ  
ルノウの言うように、哲学全体が「解釈学的哲  
学」として解釈学によって基礎づけられるべき  
だと考えるならば、デイルタイが完成すること  
なく残したこの問題を、現代的視点から追求し  
ていくことが今後のデイルタイ研究の重要な課  
題のひとつになると思われる。

Johannes Rütche, *Das Leben aus der Schrift verstehen – Wilhelm Diltheys Hermeneutik.*  
(Europäische Hochschulschriften, Reihe X X  
Philosophie, Band/Vol.576), PETER LANG,  
Bern · Berlin · Frankfurt a.M. · New York ·  
Paris · Wien 1999, 489 S.